

GWJ 吉村和就氏が千葉工業大学で講演 「大震災の被害は全て水の姿に」

東日本大震災以後の日本について「水」の視点から考えようと、千葉県習志野市の千葉工業大学で14日、グローバルウォータ・ジャパン代表の吉村和就氏による講演会が開かれた。「すべて水の姿となって現れた大震災以後の日本」と題された講演会で吉村氏は、「津波、原発の冷却水喪失、上下水道施設の破壊、水道水の放射能汚染など、大震災の被害は全て水の姿となって現れた」と話した。

講演会は同大学環境共生研究室が主催した。吉村氏は、気仙沼市や陸前高田市など、現地調査を行った東日本大震災の被災地の状況を踏まえ、「被害状況により復旧と復興に分けることが必要。復興の場合はエコタウンにするべき」と提案。「水源は二重化し、水道は二元給水が望ましい。高台に町をつくれれば、下水の落差を利用した小水力発電もできる」「バイオトイレの活用、汚泥の資源化なども進め、エネルギーには太陽光や風力を使う。最近は波力発電の試験も進められており、波が多い三陸などでは有効かもしれない」と復興に向けた具体案を示したほか、「東北の復興は、日本技術を海外で展開するための実証モデルにもなり得る」と呼びかけた。

一方、吉村氏は荏原インフィルコ勤務時代に電力・原子力部に在籍し、福島第一原発6号機の復水脱塩装置に関わった経験を持つことから同原発事故についても触れ、「原子炉は水がないと成り立たないシステム。しかし水屋の意見は取り入れられず、

電気屋だけで原子炉は運転されている。水のありがたみを忘れて設計されたことが今回の事故につながった」と指摘。また、「原子炉のポンプの電気容量は桁違いに大きく、バッテリーでは到底賄えない。したがって外部電源はいかなる時でも確保しなければならないが、東電は電気は止まらない、止まってもすぐに回復すると考え続けた」と述べ、「地震、津波は天災だが電源の喪失、初期対応の失敗、放射能漏れはすべて人災だ」と批判した。

また、下水汚泥から放射性物質が検出されている問題については、「下水道が悪いように思われがちだが、むしろ下水道が地域の雨水と汚水をきちんと処理しているということの証明になる」と述べた。

このほか講演会では、世界の水ビジネス事情や日本の水戦略についても解説。「技術があるから勝てるというのは一番の誤解。相手のニーズに合わせるものが求められる。外貨の獲得は国益であるというポリシーを持ち、ナショナルフラッグの企業をつくっていくべきだ」と訴え、会場に集まった約200名の聴衆は熱心に耳を傾けた。



講演には約200名が集まり会場は満員となった